

Tracing the History of the Ichikawa Ichizō Theater Troupe, *Koshibai* (Minor Style Kabuki) Troupe until 1975

ASANO Hisae

The purpose of this study is to shed light on *Koshibai* (minor style Kabuki) theater groups which have rarely been discussed in the history of Japanese theater. There are numerous studies of major Kabuki plays, and of local plays performed by amateurs as a form of folk performing art, but there are very few studies of *Koshibai* theater groups which were mainly traveling troupes. *Koshibai* troupes of the Showa period, in particular, have been treated as a vestige of a disappearing art form. However, the *Ichikawa Ichizō Gekidan* (Ichikawa Ichizō Theater Troupe) continued to perform original Kabuki plays until 1975. This study focuses on this troupe, and offers a clearer picture of the reality of the Kabuki world from the early Showa period to 1975, which was not limited to Shochiku Major style Kabuki. One of the factors that enabled the Ichikawa Ichizō Troupe to remain active until 1975 was the formation of a group of actors who were all family members. In addition, many of the good actors of Kabuki who wished to improve their skills but were not hired because they were not members of *Monbatsu* (the inner Kabuki clique) were able to join *Koshibai* troupes; this active interaction made it possible to continue performances of authentic Kabuki plays until 1975, distinct from *Kengeki* (the samurai plays that featured swordplay). It is also noteworthy that there were many female Kabuki actors among the members of these troupes. Although the ban that had allowed only men to become kabuki actors was lifted in 1890, the common belief that Kabuki actors are male has continued to the present day. We should reconsider the common view that “Kabuki is performed by men” as one that was created in the modern era.

昭和五十年まで活動した中芝居劇団

市川市蔵劇団の軌跡 その一

— 小芝居の歌舞伎で活躍した役者家族とその周辺 —

浅野久枝 ASANO Hisae

一、はじめに

本研究のきっかけは元中芝居役者、岩井小紫師との出会いによる。筆者は、二〇一一年、長浜曳山祭調査の調査員として子供歌舞伎の調査に赴いた。子供歌舞伎では「振付け」と呼ばれる指導者が子供に歌舞伎を教えている。筆者はその指導者たちについて興味を持ち、調査(註1)を始めた矢先、「旅を廻っていた歌舞伎役者さんのおいでになる」との情報を得た。いわゆる「旅廻り」の歌舞伎劇団は昭和三十年代にはすべて消滅したと思っていたため、実際に地方巡業をしていた役者さんとお会いするとは思っていなかった筆者は、早速インタヴューを申し込んだ。その方が岩井小紫師(註2)であった。そこでさらに驚くことになった。三代目岩井小紫(本名兼元多恵子 昭和十一年生)師は女性なのである。実際の役者経験者で、なおかつ女性。歌舞伎というのは男性が行うものとはばかり決めつけていた筆者が想像だにしていなかったことであった。遠目で小紫師の姿をお見かけした筆者は、小粋に着物を着こなし、立ち居振る舞いはいかにも役者という凛としたお姿に一目ぼれし、インタヴュー前日は眠れないほど興奮した記憶が未だ新しい。これがきっかけとなり、彼女に対するインタヴューは現在に至るまで続けて

いる(註3)。

彼女が所属していたのは主に丸本物の外題を得意とする関西系小芝居(中芝居)の歌舞伎専門の劇団「市川市蔵劇団」であった。剣戟(剣劇)を発祥とする大衆演劇とは一線を画していた。関東では「小芝居」と称されるジャンルだが、彼らは「中芝居」あるいは「中歌舞伎」(註4)と称している。市川市蔵劇団が解散したのは昭和五十年。本格的な歌舞伎で地方巡業をしていた最後の中芝居劇団なのである。また、インタヴューの中で他にも中芝居の劇団があったことを知った。しかしこれまで戦後の中芝居劇団についてはほとんど注目されてはいない。

明治から戦中戦後、そして現在に至るまでの大歌舞伎について、歌舞伎研究者たちによる著述、評論、研究は枚挙にいとまがない。一方、素人が祭などで行う地歌舞伎、地芝居、素人歌舞伎については民俗芸能研究者が研究を進めてきた。ところがそのほごまに位置するような小芝居・中芝居については阿部優蔵(註5)らの著作以外、なかなか注目されてこなかった。が、近年、江戸末期から明治期の小芝居についての研究はいくつか発表されている(註6)。しかし、昭和の時代、戦後に至るまで、市川市蔵劇団のような中芝居(関西系小芝居)の歌舞伎劇団が数多く活躍していたことは全くと言っていいほど知られていない(註7)。小芝居の劇団と言うと、大衆演劇の劇団と混同されている節もある。

筆者は昭和初期から昭和五十年くらいまでの、松竹の大歌舞伎だけではなかった歌舞伎の実態の一端を明らかにしたいと考えているが、本稿では昭和五十年まで全国を廻って歌舞伎を上演していた市川市蔵劇団の成り立ちとその関係者を中心に述べてゆきたい。

二、関東系小芝居と中芝居(関西系小芝居)の概略

市蔵劇団の活動メンバーを明らかにするために小芝居・中芝居劇団について概観しておく。

関東系の小芝居で有力な劇団はかたはみ座(註8)である。松本高麗之助を中心にとして坂東竹若・坂東鶴蔵・市川門三郎・市川女猿・市川鶴之助などが活躍した。一方、関西に目を転じた時、市松延見子を座頭とする劇団と新鋭歌舞伎との二つが重要である。市川市蔵劇団とはほぼ同時期迄活動していた中芝居劇団の細川興

行もあった。まずはそれらについて概観しておく。また、昭和三十年代に人気を得た市川少女歌舞伎は小芝居出身の市川升十郎(註9)が率いた劇団だが、市蔵劇団と人的交流がないため今回は触れない。

〔市松延見子一座〕

市松延見子(本名松尾波儂江 明治三十四年生)についても本稿では概略のみ述べるが、彼女は歌舞伎を専門としたいわゆる女優者(註10)であることに注目しておきたい。延見子の夫は大阪で新歌舞伎座も持っていた松尾国三(註11)である。松尾は九州出身で、浪曲師から始まり十六歳で太夫元となった。その後二代目実川延若の弟子となり大正七年から実川延十郎、昭和五年頃から六代目嵐三五郎として活動し、昭和九年からは本格的な興行師となり、手広く興行を行った。

昭和三年の松竹の訪ソ海外公演に先立ち、大正十五年にアメリカ・カナダで初めて歌舞伎の海外公演をしたのは実川延十郎(松尾)一座である(註12)。そして昭和六年にも再びアメリカ公演を行い、

その時写したのが写真1である。前列中央に秩父丸の浮き輪を持った嵐三五郎と松尾国三と、花束を持つ延見子が座っており「嵐三五郎御一行様」の飾り帯が見え、後ろには乗船した秩父丸が写っている。この写真は三代目岩井小紫(兼元多恵子)師所蔵のものである(註13)。後列左から六人目の背の高い男性が多恵子の父、のちの三河屋市川市蔵(本名藤田栄)であり、前列中央に座る延見子の真後ろの人が多恵子の義理の叔父、初代岩井小紫(後述)と思われる。松尾は昭和八年頃、三五郎の名前を譲り、興行師松尾国三として市松延見子を座頭とする座組をして活躍した。延見子の相手に五代目中村福助(高砂屋)を特別加入で呼ぶなどして



写真1 昭和6年アメリカ公演をした嵐三五郎(松尾国三)一座

中芝居の一流どころの劇団に育てた。延見子は『演藝画報』でもたびたび取り上げられ、現片岡仁左衛門が『義賢最期』の型を市松延見子に習ったということは周知の事実である。

〔新鋭歌舞伎〕

松竹所属の名題役者たちが、松竹から離れて作った劇団が昭和十六年十月に結成された新鋭歌舞伎である。片岡秀郎を顧問(師匠格)とし、市川荒太郎を中心に中村雁之助・片岡松太郎・中村福太郎・尾上多見丸・松本京之介などが主要メンバーであり、市川右升(のちの五代目上村吉弥)や七代目嵐三五郎も後に加入した。五代目上村吉弥を取り上げたルポルタージュ『一方の花』(註14)によれば、この新鋭歌舞伎は大変な人気であった。しかし、「阿古屋の右升か、右升の阿古屋か」と絶賛されていた右升が松竹に引き抜かれ、中心となっていた荒太郎が昭和二十三年、三十七歳で死去したと終戦の時期とが重なり、活動は縮小した。昭和二十年から二十一年頃は東宝専

属の劇団となり、最後は松竹に戻ったようだが昭和二十年代後半に解散となった。メンバー各々は座頭となつて巡業したり、他の劇団に加入したりなどして活動を続けた。新鋭歌舞伎は前進座と同様、門閥ではない、あるいは腕があつても役のつかない役者達が大興行資本から離れて結成した劇団であった。

〔細川興行〕

細川興行は市川市蔵劇団と同じく、歌舞伎専門で地方巡業をした中芝居劇団である。昭和四十五年に解散した。市蔵劇団に次いで長く活動していた劇団である。広島を本拠地として



写真2 昭和30年頃の細川興行の座員

いる森地市蔵が太夫元（興行師）で戦前から細川興行を率いていた。森地没後は、三味線方の豊沢重松（註15）が太夫元を兼ねて活動した。写真2（註16）で真真中に座っている年配者が森地、前列左から五人目が豊沢重松である。細川興行は昭和十年代から昭和二十年代半ばまでは市川右団次の弟子、市川右田次を看板にして活動することが多かった。右田次はなかなか派手な芸風で、人を引き付け、看板として集客できる役者だったと多恵子は聞いている。昭和十五年頃から十九年まで細川興行に在籍していた五代目上村吉弥（右升）も「右田次のように、旅の芝居にもいい役者がたくさんいましたね。小芝居しか回らない役者やけど、いまから思いますと、いまの松竹の役者はんにあんまりヒケをとらん人がたくさん働いてました」（註17）と回想している。しかし、右田次没後、看板役者がおらず、市川榮舛（前列左から六番目）（註18）や七代目嵐三五郎（右上枠内）など看板になれる良い役者を加入させる努力もした。近世近代歌舞伎研究者 小池章太郎の父、小池樞歌は浜松で柳川亭という料亭を営み、芝居に造詣が深く、浜松の演劇界や細川興行にとってはパトロンの存在であったが、彼の日記には昭和三十二年、市川榮舛を再加入させるために自身が尽力したことを記している（註19）。その後、細川興行には新鋭歌舞伎の顧問だった片岡秀郎も招いた。劇団名は「市川右田次一座」あるいは「精鋭大歌舞伎」、名古屋納屋橋の富士劇場で常打ちしたときは「富士歌舞伎劇団」と名乗ることもあった。その他、細川興行には沢村国十郎（前列右から三番目）・大谷広三郎（前列左端・右田次の女房役であった女方の尾上梅玉（前列右端）・初代扇雀（二代目鴈治郎）の弟子であった中村扇助・そして中村芝蝶・沢村曙當（森地の真後ろ）、女役者では重松の妻の市川吾妻（前列左から二番目）（註20）などが居た。

細川興行と市蔵劇団はどちらも歌舞伎専門の中芝居劇団であり、二つの劇団を行ったり来たりした役者は多い。また片岡秀郎・中村福太郎・七代目嵐三五郎などのように大歌舞伎と中芝居の役者が盛んに交流していたことも注目しておきたい。

三、市川市蔵劇団の構成メンバー

次に市川市蔵劇団の構成員を見ていくこととしよう。市蔵劇団が解散したのは

昭和五十年。そこまで長く劇団としての活動ができたのは、三代目岩井小紫（多恵子）曰く「家族や親せきで固めていたから」だという。多恵子は市川市蔵（本名藤田栄）の次女で、兄も姉も弟も役者。兄嫁も小紫の夫も役者で実母や叔母は長唄や下座を担当した。まずはその家族について紹介していく（註21）。

「市蔵の岳父 中村芝寛と大森家」

市蔵劇団の話をするためには市蔵の妻、旧姓大森道子の家系から説明しなくてはならない。

初代備前屋中村芝寛 **大森運平** 市蔵の妻道子の父は明治五年十一月、岡山市西大寺生まれで、本名は大森運平。備前屋中村芝寛（初代）と名乗る役者であった。経歴は不明である。中村芝寛は岡山辺りでは比較的大きな中芝居劇団を率いて本格的な歌舞伎を上演していたという。彼自身が作った独自演目（註22）も複数保持しており、『お光狂乱』という『お染の七役』の大切所作を下地に独特な振付をして作った独自演目を当たり芸にしていた。所作事も達者だったと思われる。弟子も数多かったようで、長浜曳山祭で長らく曳山子供歌舞伎の振付けを行った中村芝蝶は芝寛の最後の弟子である（註23）。初代芝寛は昭和十二年九月に死去し、以下に述べる妻ちゑ、息子栄、娘登美子は、函館を本拠地としていた初代市川団四郎の一座に合流した（後述）。

中村芝寛の妻 **ちゑ** 初代中村芝寛の妻は旧姓将積ちゑ。現在の兵庫県三木市口吉川町出身で、明治八年十二月生まれである。鳴り物を修得しており、とくに鼓が得意であったというので、子供の頃から芸事を習得していたと思われる。芝寛と結婚してからはオイエサン（お家さん）と呼ばれ、劇団を支えた。この二人の間には養子一名と、女四人、男二人（一名は早世）の実子が居る。市川団四郎一座に移籍後は鳴り物を担当した。

雛助 **芝寛養子の多三郎** 多三郎（明治三十三年生）は数え年四歳で大森家と養子縁組をしており、役者にするために養子に取ったと伝えられている。雛助を名乗る役者となった。結婚して一子を儲けていたが、女役者の市川九女八（後述）と出会い、二人で養父芝寛の劇団から脱退したが、その後九女八とは離別したようである。養父とは絶縁状態であったが、昭和十二年九月に芝寛が死去した時、養子といえども長男である多三郎が帰宅するまで、出棺せず、その当時すでに劇

団を率いていた娘婿である藤田栄（のちの市川市蔵）の若い衆（役者たち）が遺体を守って、多三郎の帰りを待っていたとの逸話が残っている。多三郎自身、昭和十五年、数え年四十一歳の若さで死去している。

芝寛長女 道子 初代芝寛の長女が道子（明治三十六年四月生）である。道子は幼いころから長唄を習得していた。芝寛の劇団に所属していた藤田栄（当時の芸名は不明）と恋愛関係になったが、父芝寛は未だ下廻りだった栄との結婚を反対し「裸で出て行け」と追い出したため、二人は駆け落ちして劇団を飛び出した。夫市蔵（藤田栄）の劇団でも長唄などを担当し、またオイエサンとして劇団を支えた。この二人の間に三代目岩井小紫（多恵子）や二代目団四郎（勝三）たち役者兄弟が生まれるが、それについては後述する。昭和五十九年七月没。

芝寛次女の豊子と夫の中村芝之助（小川徳蔵） 初代芝寛の次女が豊子（明治三十九年三月生）である。父芝寛（大森運平）の劇団に居た役者、中村芝之助（本名小川徳蔵）と昭和六年に結婚した。芝之助は女方の役者であった。芝寛の死後、芝之助は役者を廃業して故郷の福岡県久留米市に戻り、食品売買業を営んでいたが、二代目小紫（智子）が病氣休演した穴を埋めるために、一時期市蔵劇団に呼ばれ、加入した。その後、北九州の歌劇団出身の佐藤キミエ（のちの岩井此の糸）を紹介して福岡に戻った。しかしやはり芝居に戻りたいと昭和三十年代後半に家業を片付けて市蔵劇団に復帰し、新鋭歌舞伎に居た初代中村福太郎と一座した。『忠臣蔵九段目』で福太郎の戸無瀬に芝之助がお石を演じた時「自分とぶつかってできる役者だ。久しぶりにこんな良い芝居ができた」と福太郎が褒めるほど、この良いしかりした腕のある役者だった。琴も三味線も弾けて「何でもこなせる女方さん」だったという。「芝之助叔父さんは三味線もみな行ける人なんやけれども、私が若い時にね、楽屋でお琴を弾いていたらその人が来てね、ぽっと弾いてみたんよ。その時に音が全然違うの。腕が違うとこんなにもお琴の音が違うんや、と思ったことを覚えてる」と多恵子は回想している。踊りも上手で、多恵子はこの叔父にも踊りを仕込まれた。彼は昭和四十三年十一月に亡くなるまで役者をした。

坂東三津麓 芝寛三女の静香 三女は明治四十三年九月、岡山市西大寺に生まれた静香である。長尾家の養女となり大阪市に住んだ。養母の長尾う乃（註）はもと西川流の名取だったが、坂東流の師匠中村安之丞と結婚したため坂東の名取

となった。「踊りの神様」ともいわれた七代目坂東三津五郎にその芸を認められ、他流からの移籍にもかかわらず直門の名である「三津」の字を頂き坂東三津妻と名乗った人だった。三津妻は大正十三年、岡山県津山市で行われた催しで七代目が振り付けた清元『津山の月』を初演している。静香は大正十三年、数え年十五歳で三津妻の養女となった。三津妻の縁もありまた踊りも上手であったために七代目三津五郎の住み込みの内弟子となって修業した。坂東流は踊りを演劇的に捉えることを重視している流派であるため、役者の家に育った静香の踊りは七代目のお眼鏡にかなうものだったことは充分に考えられる。八代目三津五郎はこの頃の思い出として「魚を焼いているから見ておいてくれ」と言いつけたが、静香は焦げてもそのまま魚を見ていたと笑い話で語っていたという。芝寛の劇団内には弟子も多く、家事などには手を染めずに幼いころから芸事はかりしていたことが分かるエピソードである。修業を終えてから大阪ミナミの芸妓となり踊りのうまさの評判の名妓と言われた。その後は舞踊家坂東三津麓として八代目三津五郎近くで活躍した。芸には厳しく、とても怖い師匠として有名だったが、毎朝牛乳

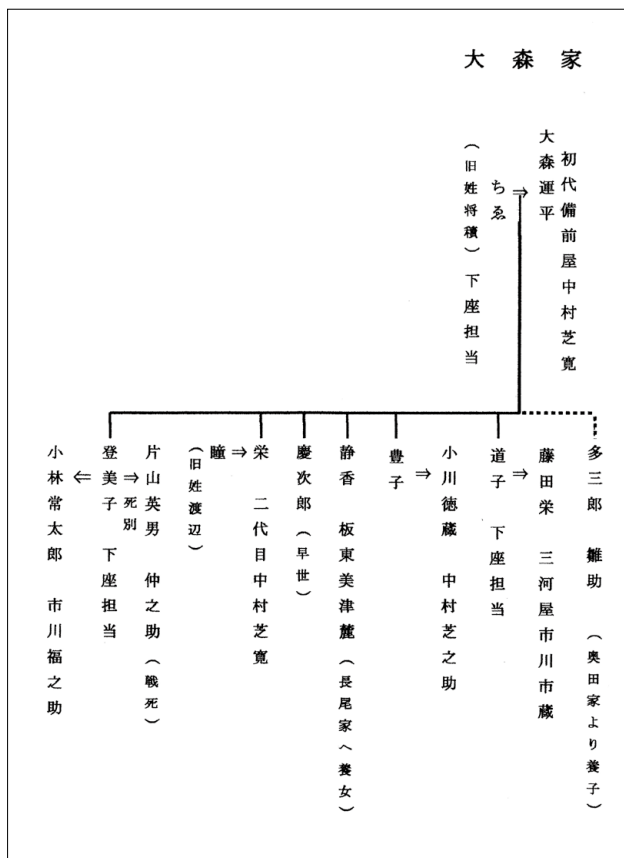


図1 大森家系図

で顔を洗うなど美容や身だしなみには人一倍気を遣う人であった。平成八年二月に没したが、没後に残された金庫の中には芝居の書付が大量にあったという。役者にはならなかったが、坂東流ゆえ芝居の勉強は怠っていないからであらう。

二代目中村芝寛Ⅱ芝寛次男の大森栄 芝寛の次男大森栄は大正四年八月に、やはり岡山市西大寺に生まれた。十代のころは妹登美子とともに姉静香の大阪の家に同居し、坂東流を習ったが、それを嫌い、六代目尾上菊五郎門下で役者もしていた大阪在住の西川扇左衛門という師匠に別稽古に行き、『連獅子』『鏡獅子』など六代目の型を習得し、なおかつ義太夫の段物や長唄の三味線まで習得した。扇左衛門師匠は六代目の門下であった名古屋西川流西川鯉三郎の弟子筋であったと思われる。栄は所作事専門で活躍し、『諏訪明神』という新しい所作事の創作もしている。これは長唄の作曲も振付もすべて二代目芝寛が作ったオリジナル作品である。三代目小紫(多恵子)と二代目団四郎(勝三)は、この叔父から所作事をみっちり仕込まれた。平成八年一月没。

芝寛四女の登美子と夫の仲之助(片山英男) および市川福之助(小林常太郎) 四女の登美子(大正七年十二月生)は、鳴り物も三味線も唄も修得していた。仲之助と名乗る東京名題の女方、片山英男と結婚した。仲之助(片山)が戦死したため、登美子はその後、初代団四郎一座の立女形であった市川福之助(本名小林常太郎、大正二年五月生)(註25)と昭和四十年に結婚した。登美子は団四郎一座では下座の鳴り物や長唄を担当した。福之助は他所の劇団でいい役もこなしてきたらしく、数多くの演目に精通しており、「口立てで、外題を始めから終いまでだーっと言えり」ほどしっかり記憶していたので「歩く百段集」と言われていた。『忠臣蔵』の所作事「落人(道行旅路の花婿)」の伴内や「六段目」の女術などの役をサラッとこなす腕達者だった。多恵子は新しい外題の役を振られた時には、福之助叔父さんの所へ行つて、稽古をつけてもらったという。役者をしながら本名の小林常太郎で市蔵劇団の頭取も勤めた。

以上のように大森家では、当主の運平、養子の多三郎、息子の栄は役者となり、道子をはじめとする娘たちは三味線、唄、鳴り物を得意とし、その夫たちはすべて役者という、それなりに腕のある役者集団、役者一家であったのである。また、坂東三津麓(静香)のように舞踊家として当時の坂東流の中心で活躍する人もいた。

「三河屋市川市蔵の藤田家」

さていよいよ、戦後に三河屋市川市蔵を名乗り、昭和五十年まで歌舞伎専門の中芝居劇団を率いて地方を巡業していた藤田栄とその家族について述べていこう(写真3)。

藤田家 藤田栄の先祖は家康ゆかりの寺、大樹寺の門を守る家柄で、周辺の農家からは「藤田様」と呼ばれていた。藤田家は廃藩後も岡崎に住み、一般家庭であった。

竹本巽太夫Ⅱ市蔵兄の謙治郎 まずは藤田栄(のちの市川市蔵)の兄である。藤田家は一般家庭であったが、藤田栄の兄、明治二十二年一月生まれの藤田謙治郎は東京に出て義太夫の竹本巽太夫となった。巽太夫が松竹と契約したかどうか確実なことはわからないが、藤田家の伝承では松竹に入ったと伝わっている。神田区中猿楽町に居を構えて活動したので、家族内では「神田の伯父さん」と呼んでいた。大正十二年五月の神田劇場番付には、六代目市川団之助(註26)・二代目吾妻市之丞(註27)・中村幹尾(註28)らの公演の太夫として竹本巽太夫の名が記載されている。また四谷大木戸(現新宿)の大国座で大正十年十月から大正十四年七月まで、二代目河原崎権十郎(註29)・吾妻市之丞・松本高麗之助(註30)・市川栄舛らが出演する舞台の番付にも載っている。小芝居系の小屋(劇場)である四谷大国座の座付きの太夫であった可能性が高いが、大正十三年七月、七代目沢村宗十郎・十三代森田勘弥に村田嘉久子が加入した番付にも巽太夫の名がある。関東大震災後、大正十三年一月に再開場した大国座であったため、大歌舞伎の役者を招いていたものと考えられるが、藤田栄が座組した劇団で『壺阪靈験記』を語ってもらったとき「兄貴(巽太夫)は、宗十郎の壺坂をついさつきまで語っていたんや」



写真3 昭和30年頃の藤田家と大森家の家族写真 前列右から二代目小紫と子供、三代目小紫、市蔵、市蔵の妻、荒五郎と子供、二列目右から二代目小紫の夫、芝之助の娘、二代目芝寛の妻、豊子(芝之助妻)、登美子(福之助妻)、此の糸(荒五郎妻)、三列目右から二代目団四郎、二代目芝寛、芝之助長男、福之助、左上枠内は芝之助。

と藤田栄は言っていたという。大正十三年七月の沢村宗十郎の出演した外題に『壺坂靈験記』は出してはいない。つまり大國座以外でも宗十郎の舞台で巽太夫が語る場面があったということになるのか。また『国立劇場竹本研修教材竹本メリヤス集成』を編集した野沢松三郎が「巽太夫とご一緒させていただきました」と述べていたというので、それなりの活動をしていたと思われる。市蔵劇団のその後の活動において巽太夫、藤田謙治郎の存在は大きかったと思われる。

三河屋市川市蔵 藤田栄 さて、三河屋市川市蔵（本名藤田栄）である。明治三十四年十二月、現在の愛知県岡崎市に生まれた。兄謙治郎即ち竹本巽太夫を頼って東京に出たと思われる。大歌舞伎で名題になるべく修業をしたが、結局名題になる前に、大歌舞伎から離れた。一時期、月形龍之介が出演する映画の立廻り役で出演したこともあった。下廻り時代にトンボをみっちり修業したようで、その後、弟子にトンボを仕込み、トンボの切れる役者として松竹で活躍した弟子も養成した。栄はあちらこちらの小芝居・中芝居の劇団で修業したようで、その一つが、先に述べた初代備前屋中村芝寛（大森運平）の一座であった。後に岳父となった初代芝寛に結婚を反対され、道子を連れて劇団を出たが、「よし見ておけ。いずれば儂がオヤジを使つてやるようにしてみせる」と心に誓い、何とか立派な一座を作りたいと努力したという。岳父芝寛の晩年にはすでに栄自身も劇団を率いており、和解した岳父の最期を昭和十二年に看取っている。

市松延見子の一座には長く居たようで、大正十五年のときは定かではないが、昭和六年の延見子のアメリカ公演では市蔵（当時の芸名は不明）も渡米している。写真1にあるように初代岩井小紫も、後に市蔵劇団に

たよ



写真4 嵐伝二郎（のちの市川市蔵）の楽屋姿



写真5 嵐伝二郎『先代萩 竹の間』嘉藤太

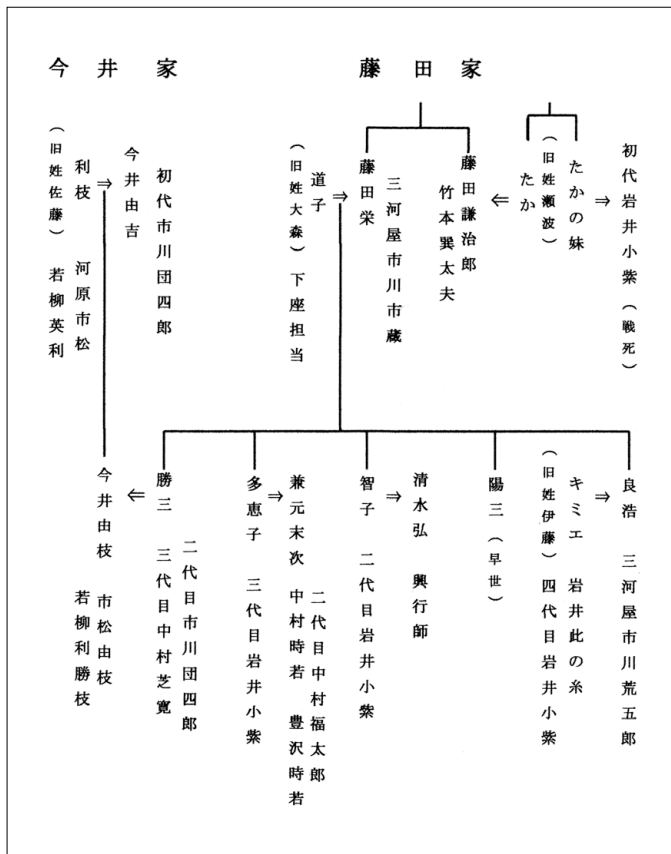


図2 藤田家・今井家系図

来た片岡長太夫や緑屋尾上緑左衛門も一緒に渡米したのではないかという。船の上で延見子が『道成寺』を上演した話を家族に語っていた。松尾の自伝にはその時の『道成寺』の写真が載せられている(註3)。アメリカ滞在は三ヶ月の長きにわたった。団員たちは床屋でアメリカ人の髪型にされることを嫌がったため、市蔵が皆の髪をバリカンで散髪したという。器用な人だったようである。また、この滞在期間に英語も学び「この当時の人としては珍しくローマ字が読めた」という。当時、アメリカでは玩具のヨーヨーが流行しており、日本に持ち帰って売り出そうと思いついたようだが、実行せず、何年か経って日本で流行ったとき、「これは儂が持つて帰って来たのに」と残念がっていたらしい。商売に対する目の付け所があったことがうかがわせる逸話である。

この頃の栄の芸名は沢村田左衛門、嵐伝二郎など、いくつかの名を名乗っていた。嵐伝二郎の時代の写真が残っている(写真4)が、鼻痕からの引き物が山と積まれており、人気のある役者であったことが分かる。中村幹尾も同座する一座で横

浜の劇場にも出ていた時期があり、身体が大きかったので敵役を主に演じていた(写真5)。その後、太夫元として自らの劇団を立ち上げ、座頭としても勤めたが、太夫元としての手腕はなかなかで、集客力のある座組、演目構成をすることに長けていたという。戦中戦後は娘の智子(二代目小紫)を連れて市松延見子の一座や細川興行に加入した時期もあった。昭和二十八年前後、興行師の出浦(元竹本越雄太夫)を介して「三河屋市川市蔵」の名前を襲名した。その時には何かの書きものと刀を一振り頂戴してきたという。そして昭和三十年頃から「市川市蔵劇団」の名前で活動するようになったと思われる。最盛期は四、五十人の団員を抱えていた。集客の良い劇団だったせいも、松竹から劇団を専属にとの申し入れもあったが、お断りしたという。岐阜県下呂市鳳凰座の座主の息子である竹本美功太夫(中島功)は、鳳凰座に来る中芝居劇団の中で「一番値の高いのが市蔵劇団だった」と記憶している。昭和四十年代後半には太夫元を息子たちに譲ったが、昭和五十

年の劇団解散まで現役の役者を勤めた。昭和五十六年一月没。

初代大和屋岩井小紫Ⅱ巽太夫の義弟 巽太夫(藤田謙治郎)の妻、(瀬波)たか(明治三十三年生)の妹の夫が大和屋岩井小紫を名乗る役者であった。本名、生没年は不明である。小芝居(中芝居)系から大歌舞伎に入り名題になったが、主に小芝居で活躍したようである。大和屋岩井小紫の名跡は岩井半四郎系の名前だが、ここで取り上げる小紫が大歌舞伎の名跡に繋がるかどうかは不明で、これについては別に論じたい。本稿では、「岩井小紫」は市蔵劇団内でその後も保持した名跡であるため、ここでは「初代」としておく。昭和四年の読売新聞の記事(註32)には「小芝居の達者どころ」として岩井小紫の名が挙げられている。先に述べたように、松尾国三(当時は嵐三五郎)が昭和六年にアメリカ公演をした際、小紫も参加した可能性がある(写真1)。また、昭和十一年九月、東京本所の寿劇場に於いて市川鶴之助(註33)・実川延松(註34)らを上置きとする一座で小紫は「東都初お目見え」をし、『新口村』の梅川、『黒手組助六』の揚巻などを演じている。また、昭和十二年十二月からは延見子の一座で、十三年三月まで寿座に出演している(註35)。寿座に名前がのぼらなくなった昭和十三年後半あるいは昭和十四、五年頃より、藤田栄(市蔵)が率いる劇団に入ったものと思われる。巽太夫は「興行師をしたいタイプ」だったため、義理の弟である小紫に声をかけたようである。六代目沢村田之助のエッセイ(註36)の中に、昭和十五年に地方巡業で新潟に行っ

た際「地方の芝居の超人気役者岩井小紫」が一座し、『乗合船』の外題で「伯父高助と父の太夫、万蔵」、そして白酒売を岩井小紫が勤めたという。そして切狂言は『本朝廿四孝』奥庭の場で八重垣姫を小紫が勤めた。田之助は「とにかく美しい女方さんでした」と回想している。「この人はのちに大歌舞伎に入りましたが、気の毒に腰元のような役ばかり、私が芝居の世界に戻ったころはもう顔は見られませんでした。たぶん故郷に戻られたのではないか」としているが、実際には召集され、すぐに戦死した。「女方の体つきの人だったのに、(兵隊として)おまえ動まるかと聞かれて、はい、つて言っちゃったらしいのよ。兵隊の格好をして泣きながら楽屋を出て出征して行った」そうであり、多恵子弟の勝三はおぼろげにその姿を覚えていてという。多恵子は彼の舞台を記憶していないが、彼女の父、兄、姉たちは初代小紫が「良い役者だった」ことを記憶していたという。

三河屋市川荒五郎Ⅱ市蔵長男の良浩 市蔵の長男、三河屋市川荒五郎の本名は藤田良浩。大正十三年十一月に神戸市で生まれた。あちらこちらの劇団で役者修業をしたようである。「荒五郎」襲名については不明であるが、「市川市蔵」襲名と同時期ではないかと推測する。荒事師の役柄だったという。昭和三十三年前後、太夫元として余裕のきた市蔵はもう一つ劇団を作り、「二部」と呼んでいたその劇団の太夫元を荒五郎に任せたが、一年ほどでその劇団は市蔵劇団に吸収した。市蔵劇団解散後は妻キミエ(岩井此の糸)の実家である福岡県八幡市に住み、舞踊の鬘屋と顔師を営んだ。現在は荒五郎の息子が継承している。

二代目大和屋岩井小紫Ⅱ市蔵長女の智子 市蔵の長女智子は昭和四年六月、神戸市で生まれた。市蔵は智子を大変に可愛がり、役者としての英才教育を施した。市蔵自身が加入する劇団には智子を連れて行った。市松延見子の一座にも加入し、延見子の部屋子として修業もした。市蔵は智子を延見子のようにしたいと考えていた。智子もそれにこたえ、松本高麗之助の一座では十代にもかわらず『黒手組助六』で揚巻を演じ、細川興行に加入した時は父、栄(芸名不詳)の甚五郎で京人形を演じた。五代目嵐瑠蔵(のちの五代目嵐瑠瑠)(註37)と六代目嵐みんし(註38)が父の劇団の上置きで居た時には瑠蔵の十次郎で初菊を演じた。『阿古屋』では三曲もこなし、存在感のある女方を勤められる器量と力量を持っていた。また初代小紫の芸をよく見ており、「小紫さんの型はこうだった」とよく覚えていたという。初代小紫が出征した後、「岩井小紫」の名跡を智子が継ぎ、岩井小紫

劇団として智子を看板とする劇団で活動したのが昭和二十二年頃からである。智子は昭和二十六年頃結核を発病し一時期舞台を降板したが、昭和二十七年に興行師の清水弘と結婚し、昭和二十八年には一児を儲けた。出産後は時々劇団に参加しその頃は雪之丞と名乗っていた。妹の多恵子とともに阿古屋が演じられる役者が二人いるとのことで『二人阿古屋』を上演出来たのもこの時期である。が、元々からだが強くなかった智子は結核が再発し、残念なことに昭和三十三年三月、満二十八歳で亡くなった。

三代目大和屋岩井小紫Ⅱ市蔵次女の多恵子

市蔵の次女、多恵子は昭和十一年八月、愛知県岡崎市の藤田家で生まれた。昭和十五年、数え年五歳の時に『壺坂霊験記』の観音役で初舞台を踏んだ。場所は不明である。この時は伯父竹本巽太夫が抱きかかえて後見をし、台詞も巽太夫が言ったことを彼女は覚えていた。その後市川鶴之助や松本高麗之助の一座など、父が加入する劇団の子役として舞台に立った。小学校在学中は岡崎市の父方伯母の家に暮らし、夏休みなどには子役や中子供役柄で劇団と行動を共にした。幼い時から坂東流日舞を習い、母からは長唄の三味線や唄を習った。姉智子の後見をしながら琴も習得。義太夫の三味線も語りも自然と覚えたという。また、母方の叔父二代目中村芝寛から所作事をしっかり叩き込まれた。十代前半までは腰元役などの軽い役を勤め、『鏡獅子』の胡蝶も嫌というほど勤めていた。姉智子と二人で胡蝶をしたこともあった(写真6)。客席から「双子か?」という声が聞こえたという。数え年十九(昭和二十九年)の年には叔父芝寛の推挙により、函館巴座の劇場主の反対を押し切って『連獅子』の子獅子を踊るようになった。性格的にも体力的にもしっ



写真7 三代目小紫 【本蔵下屋敷】 三歳姫



写真6 二代目小紫(左)と三代目小紫 【鏡獅子】 胡蝶

かりしていたので、飛んだり跳ねたりするような役も得意とし、「連獅子の子獅子なんか、何千回やったかわからへん」ほどである。興行師籠寅を介して大江美智子の劇団に、との話も父市蔵に持ち掛けられたが、お断りしたという逸話もある。昭和二十六年頃、二代目小紫(智子)は結核を発病したが、病が小康状態になり舞台を続けながら結婚もした。翌年に一児を儲けたため退団した。そこで、「岩井小紫」の名跡を絶えさせたくないと考えた父市蔵は多恵子が「小紫」を名乗れるよう、猛烈な特訓を行った。「稽古稽古稽古稽古の日々」だったという。『阿古屋』を勤めるためには三曲が弾けなければならぬ。琴や三味線はすでにマスターしていたが、胡弓は習っていないだったので「どうしてこんなせなかあかんの、って、泣きながら胡弓の稽古したの」という。姉は声が低く、阿古屋の唄を歌っていないから「姉の小紫のできないものは何か、そうだ私にできるのは唄だ」と、歌いながら阿古屋を演ずる稽古も重ねた。こうして三代目岩井小紫として舞台に立つようになり(写真7)、若くても重い役が付き看板役者として成長した。多恵子が阿古屋を演じられるようになった後、一時期劇団に戻っていた智子と『二人阿古屋』を上演した。これは市蔵にとっては後までも自慢の種になっていた。多恵子は弟子を取るまでになったが、昭和三十三年には市蔵劇団の劇団員、中村時若(兼元末次Ⅱ豊沢時若)と結婚。それまでは太夫元の娘なので「お嬢さん、お嬢さん」と呼ばれ劇団内で大事にされていたが、時若が「わしの嫁はんや。お嬢さんと呼んでくれるな」と言ったためそれ以後は「多恵ちゃん」と呼ばれるようになった。しかしそれ以後も良い役が付くことには変わりがなかった。二児を儲けるが、二人とも就学以前は子役として連れて行き、地方巡業を続けた。長男が学校に通うようになると次男を預けて興行を続けることに疑問を感じ、昭和四十六年頃、劇団を抜けて家庭に入った。その直後結核を発症し、つらい闘病生活を送ったが完治した。「劇団を抜けようと思ったのは、やっぱり体調が悪かったせいなのかもしれない」と回想している。その後、昭和五十年には市蔵劇団は解散し、昭和五十一年より夫は義太夫三味線の腕を買われて豊沢時若として松竹の竹本に加入した。多恵子は自宅で三味線や日舞の教授などをしていたが、振付師としての仕事も始めていた夫の補佐として振付師の活動を始め、現在は演出家兼元多恵子あるいは振付師岩井小紫の名で、舞台創造研究所や滋賀県長浜市の曳山子供歌舞伎や三役修行塾振付け部などで歌舞伎の振付指導をしている。

三代目中村芝寛 二代目市川團四郎 市蔵次男 (本名今井勝三) は昭和十五年二月、福岡県八幡市で生まれた。初舞台はおそらく数え年四歳くらいで、未就学期は子役を務めた。中学の頃より父市蔵の劇団に同行するようにになったが、父の教育方針により、下廻りから修業をした。叔父の二代目芝寛からは所作事も仕込まれた。



写真8 三代目芝寛 (のちの二代目市川團四郎) 『熊谷陣屋』 義経

所作事と二枚目 (写真8) を得意としたが、器用なので三枚目も含め様々な役をこなせる役者となった。父の前名風伝二郎などを名乗っていたが、二代目芝寛引退後、三代目中村芝寛を襲名した。昭和四十六年に初代市川團四郎の長女、今井由枝と結婚し、函館を本拠地とするようになる。岳父団四郎の名を襲名し、二代目市川團四郎となった。市蔵劇団解散後、岳父の活動を引き継ぎ、函館名士劇の振付指導を行った。石川県小松市曳山祭り供歌舞伎の太夫であった人が、役者時代からの団四郎の芸を見知っており、その人から子供歌舞伎の指導を依頼されたことがきっかけで、小松市や滋賀県長浜市の曳山子供歌舞伎および函館子ども歌舞伎などの振付指導を行うようになり、現在に至る。

岩井此の糸 市川荒五郎妻キミエ 大正十年十月、福岡県八幡市生まれ。二代目小紫の智子が昭和二十六年頃、病氣休業して看板役者が欠けたため、役者を引退して福岡県に住んでいた初代芝寛の娘婿、中村芝之助 (小川徳蔵) が一時期劇団に加入してその穴を埋めた。この芝之助が、北九州の少女歌劇団で邦楽の舞踊を踊っていた伊藤キミエを市蔵に紹介した。キミエは藤間流を習得していた。「岩井小紫」の名を消したくなかった市蔵は、次女多恵子が役者として成長するまでの一時期、臨時で「岩井小紫」を名乗らせ、また多恵子が引退後には四代目小紫を名乗らせたこともあったが、主に岩井此の糸の名で劇団解散まで活動した。劇団解散後、小紫の名を多恵子に返上し、夫良浩とともに実家の八幡市に戻り、実父が営んでいた鬘屋を継いだ。

中村時若 二代目中村福太郎 竹本三味線豊沢時若 多恵子夫の兼元末次 兼元末次は昭和六年、京都市生まれ。芸事の好きな親の影響もあり、子供の頃から芝

居が好きで藤間流の日舞を習った。京都市内の劇場に通い詰め「芝居漬け」になっていたという。昭和二十年、十四歳で女役者の中村時子の弟子となり、九月に京都南大正座『蝶花形名歌島台』の小坂部館の笹市で初舞台を踏んだ(註39)。中村時子は明治三十七年頃にはチンコ芝居(註40)の座頭になり、長じては女役者として活躍していた(註41)。末次が入門した頃には時子が座頭で、男女混合の劇団を率いていたという。時の字をもらって中村時若を名乗り、役者として活動した。時子は二代目鷹治郎も「時子さんなら」と認めるような役者だったといい、時若は後々まで尊敬したが、入門二年目に時子は死去。その後は、いろいろな劇団に加入して修業した。昭和二十二年頃には一時期、藤田栄(市蔵)の劇団に加入したり、細川興行に加入したりしていた。この頃、新鋭歌舞伎で中心的だった片岡秀郎から様々な型や心得を教えてもらったという。細川興行に在籍していた中村扇助(二代目鷹治郎の弟子)の弟子になっていた時期もある。昭和三十一年頃、女役者風八千代が率いる劇団の『太功記十段目』の初菊役として声がかかったが、十次郎と『日高川』の清姫役で声をかけ、劇団としても大きかった市蔵劇団に加入した。多恵子に言わせれば「私も梅川」「ワシも梅川」のように同じ役柄で、ライバル関係でもあった。『太功記十段目』では時若の十次郎に多恵子が初菊をするような関係だったが、縁あって二人は結婚した。その後、二代目鷹治郎の扇雀時代に女房役をし新鋭歌舞伎でも活躍した初代中村福太郎が、昭和四十年頃より市蔵劇団に加入してきた。時若は福太郎に心服し、弟子のように身の回りの世話も芸の継承もした(写真9)。福太郎は自分の後、二代目を名乗る許可を与えていたので、時



写真10 二代目中村福太郎 (中村時若) 『輝虎配膳』 勘助妻お勝



写真9『酒屋』 右 半七 初代中村福太郎 左 三勝 中村時若

若は初代の没後、昭和四十五年に二代目中村福太郎を襲名した（写真10）。もともと三味線に興味があり、役者修業の一環として、妻には内緒で義太夫の修業も始めた。昭和三十五年から鶴沢新二、ついで淡路人形義太夫豊沢権七に師事した。昭和四十年を過ぎた頃、劇団員も減少する中で「ちよっと居並びに出てみるか」と師匠連に言われて役者と三味線方を兼ねるようになった。劇団が解散する直前、京都甲部歌舞練場で市蔵劇団が芝居を掛けていた時、南座から松竹の竹本の綾太夫と藤太夫が見に来ており、彼らが時若の三味線を気に入り「あの子、ウチに欲しい」と申し入れた。仲介したのは細川興行の元太夫で当時松竹の竹本に入っていた豊沢重松であった。まだ市蔵劇団は存続していたので、劇団が解散した後、昭和五十一年より三味線方豊沢時若として松竹歌舞伎の竹本に加入した。当時の竹本連中は巽太夫（藤田謙治郎）のことを知っている人、例えば野沢松三郎らがトップの位置にいたので、時若はかわいがられたという。また岳父市蔵は興行師藤田としても名が通っていたので「藤田さんとの婚はんかいな」という意味でも可愛がってもらえた。加入後のエピソードとして、綾太夫が「あんたの所で『姫山姥』やつた女優さんは今どこにいるの？」と聞くので「それ、わたしやがな」と大笑いしたという。時若は当然のことながら、関西系歌舞伎の役者の動きには精通していた。ある時三代目実川延若が舞台上で詰まった場面で時若が三味線でそれをカバーした。役者の動きを知っているからできたフォローであった。それを大変喜んで延若が時若を信頼し、その後時若を重用した。九代目宗十郎や二代目鴈治郎、十三代目片岡仁左衛門からも関西風の歌舞伎を知っていることで信頼されていたという。平成十二年頃からは舞台創造研究所で行われた歌舞伎フォーラム「小芝居再発見」で演出を手掛けるようになり、演出家兼元末次、振付師中村福太郎としても活動した。平成二十三年十二月没。

〔初代市川團四郎の今井家〕

初代成田屋市川團四郎 **今井由吉** 初代市川團四郎（本名今井由吉）は明治三十九年、岐阜県柳瀬に生まれた（註42）。数え年二十八歳の時自らが座頭となり一座を結成した。函館市で芸妓をしていた佐藤利枝と結婚し、函館を本拠地として各地を巡業するようになった。特に北海道では人気のある一座だった。昭和十二年に初代中村芝寛（大森運平）が亡くなると、芝寛の妻ちゑ、二代目芝寛（大

森栄）、登美子は団四郎一座に加入した。昭和二十六年に初代芝寛の妻ちゑが亡くなると、二代目芝寛ら大森家の人々は市蔵劇団に加入した。こうした縁でその後、市蔵の劇団と団四郎の一座とは交流が盛んになった。市蔵劇団から函館の公演の応援に行くこともあった。昭和三十四年に団四郎一座は解散したが、市蔵劇団の公演には初代団四郎も役者として舞台上がることもあった。昭和三十八年から十一年間、函館の棒仁デパートのホールで、団四郎一座の正月公演という形で上演が行われた。この時は市蔵劇団から市蔵、初代福太郎、三代目小紫、二代目福太郎（時若）、三代目芝寛（勝三）らが初代団四郎をバックアップして舞台を盛り上げた。昭和四十六年には市蔵次男勝三と団四郎長女由枝が結婚し、勝三は二代目団四郎を襲名した。このように大森家と藤田家と今井家は深くつながっている。

河原市松 **若柳英利** **初代団四郎妻の利枝** 旧姓佐藤利枝は函館で芸妓をしており、地方巡業していた初代団四郎（由吉）と知り合い、所帯を持った。それにより、団四郎の本拠地が岐阜ではなく函館になった。利枝は若柳英利の芸名を始めとして数多くの師範免許を持ち、若柳流日舞はもちろん、長唄、義太夫などの三味線から鳴り物、はては床山まで、すべてをこなせる人である。函館の芸妓の指導は一手に引き受けていた。団四郎一座の役者、河原市松としても活躍し、下座も担当していた。

市松由枝 **若柳勝枝** **初代団四郎の長女由枝** **二代目団四郎の妻** 昭和二十一年一月、函館生まれ。東京の浅草で芸妓をしていた。母利枝同様、日舞、三味線、唄、鳴り物とすべてに長けている。市蔵劇団の解散間近には夫と共に劇団に属し、『義経千本桜 吉野山』の静御前など所作事の役者として舞台上立った。現在は函館で日舞の流派市松流を夫とともに立ち上げ、家元、市松由枝として活動している。市松流の名は母の芸名にちなんで付けたという。夫が指導していた函館名士劇では鳴り物・下座の担当及び女方の指導もし、やはり夫が振付指導をしている。各地の子供歌舞伎では、鳴り物、下座に加えて衣裳・髪屋としても活動している。

以上のように大森家、藤田家そして今井家と役者の家族の繋がりによって、歌舞伎専門の市蔵劇団は維持された。以下に述べるように小芝居・中芝居の大物、座頭級の役者も劇団員となり舞台を華やかにしたが、彼らは出入りが激しかった。

市藏劇団自体はしつかりとした役者を配する家族構成であったため、昭和五十年まで観客席を満杯にし得る劇団として維持できたのである。

四、市藏劇団に関わった役者たち

本章では、市藏（藤田栄）や小紫（多恵子）たちが参加した一座の座頭や、市藏劇団に加入した役者について述べるが、紙幅の関係で各人の概略に止めざるを得ないことをお断りしておく。

市川鶴之助 高島屋市川鶴之助は『東京の小芝居』などの著書でしばしば取り上げられている小芝居の大家である。昭和八年に浅草観音劇場の経営をしたが失敗し、地方巡業に出たという。昭和十八年前後、鶴之助の一座に父藤田栄（市藏）が加入しているときに、多恵子（三代目小紫）や勝三（二代目四郎）は子役として出演している。鶴之助は晩年に松竹の菊五郎劇団に帰ったが、不遇であったと宇野信夫が書き残している（註43）。昭和三十一年に七十四歳で死去。

沢村清之助 四代目沢村源之助（田圃の太夫）の弟子の沢村清之助（註44）は小芝居では名の残る女方で、小芝居関係の書物で必ず取り上げられている。名題役者である。昭和十年過ぎから市川鶴之助と組んで東海道や房総方面を巡業し、戦後は横浜で市川栄舛と組んで芝居をしていたという。昭和十八年前後、藤田栄（市藏）が座組をして劇団を作った時、沢村清之助を看板役者の一人として迎えた。『どんどろ』では清之助のお弓に多恵子のお鶴、『重の井子別れ』では清之助の重の井に多恵子が三吉を演じた。「目がぎよろツとした、怖い感じの人だった」と記憶し「三吉してて、花道でタターツて走って、ステーンて転んだこと、覚えてる」そうである。ある日、清之助休演の代役で尾上菊之丞という役者が重の井を演じた。その時多恵子が菊之丞に向かって「あんた、台詞わかってんのか」と言ったそうである。それから十年ほどたって菊之丞は再び市藏劇団に加入し、『摂州合邦辻』の俊徳丸を菊之丞が、浅香姫を小紫（多恵子）が演じた時、「多恵ちゃんから、台詞わかってんのか、って言われたんや」と聞いて大笑いしたという。

松本高麗之助 松本高麗之助は戦前から寿座などで活躍し、戦後はかたばみ座の旗揚げの中心的存在であった。三島由紀夫が高麗之助の松王を「大時代で面白く、これも結構」と褒めている（註45）ほどである。昭和二十一年前後、多恵子が子役

の時代に高麗之助が座頭的一座に出演していた。松竹所属の役者も多く、前進座から夫婦で加入した役者もあった。松竹の衣裳髪を使い、「結構大きな芝居」であったと多恵子は記憶している。

坂東相十郎 坂東相十郎は昭和十九年に市川栄升と池袋銀星館に出演した記録（註46）がある。昭和二十年頃、相十郎が太夫元で座組をし、松本高麗之助が座頭、二代目猿之助の弟子である猿十郎、秀猿らが一座しており、藤田栄（後の市藏）も二代目岩井小紫（智子）も加入し、多恵子も数え年十一歳くらいで子役に出ていた。『廓文章』では相十郎の伊左衛門で秀猿が夕霧を演じたが、相十郎が編み笠を取った時に「うわーっ」とジワが来るような顔をした役者だったと多恵子は記憶している。相十郎の子供も禿で出演していた。同行していた妻がビニールかナイロン製の洋服ベルトを見せびらかしていたという。人工繊維の出始めの頃でそれなりに高価な物を購入できたのであるから、相十郎の羽振りも良かったと思われる。『黒手組助六』で相十郎の鳥居新左衛門、高麗之助の助六で、まだ十七、八歳だった二代目小紫が揚巻を演じている。秀猿が女将、藤田栄（市藏）は朝顔仙平、多恵子と勝三は禿に出た。二ヶ月程度の夏興行だったため「ながい髪の毛が暑くて暑くて」禿の姿でじっとしているのがつらかったことも多恵子は記憶している。『実盛物語（源平布引滝）』では高麗之助の実盛、相十郎の小方に二代目小紫の葵御前、藤田栄の九郎助に多恵子が太郎吉を演じた。太郎吉は弟の勝三がする予定だったが髪があわず、急遽多恵子が演じた。『鳥辺山心中』では猿十郎の半九郎、秀猿のお柴で小紫がお花を演じた。

片岡秀郎 子供のころからチンコ芝居にも出演していた役者で、松竹に入り名題となった。大正末期から昭和十四年頃まで初代中村福太郎とともに扇雀（のちの二代目鴈治郎）一座（関西青年歌舞伎）の幹部として活躍した（註47）。大変に腕のある役者だったという。昭和十六年松竹から離れ、先に述べた新鋭歌舞伎の顧問として活動した。新鋭歌舞伎解散後は自身が座頭となって地方を廻った時期もあったが、昭和三十二年前後から、市川右田次没後の細川興行に加入して中心的に舞台を勤めた。中村時若（兼元末次）が秀郎と同座していたときに、秀郎から「よく見て覚えておいて」と言われた演目に『肉付きの面』（註48）がある。秀郎自身は市藏劇団に一座したことはないが、時若を始め彼の芸を尊敬していた人は多い。

初代高砂屋中村福太郎 四代目高砂屋中村福助（のちの三代目中村梅玉）の弟子

で、松竹に在籍。名題となった。若いころは初代扇雀（のちの二代目鴈治郎）の女房役を勤めた。昭和七年に松竹を離れ（註49）、浅草寿座に出演するようになったが、昭和十四年には再び扇雀の関西青年歌舞伎に一座している。昭和十六年に設立した新鋭歌舞伎に加入したが、劇団解散後は自身が座頭となり地方巡業した。昭和四十年頃、福太郎は市蔵劇団に加入し立女方として活躍した。市蔵劇団が京都で公演しているときに二代目鴈治郎が福太郎を訪ねて楽屋に来たことがあったという。先述の如く中村時若は福太郎に心服し、初代から二代目福太郎の襲名を許される。福太郎の没年は昭和四十五年頃である。「熊谷陣屋」の相模の扮装をし、出番前に脳溢血で倒れ、不帰の人となった。「楽屋の大きな鏡の前で自分の姿を見て、打掛を着てくーっとこうして自分でね、めっちゃめっちゃ満足した顔してた、って言うの。綺麗やーって思ったん違うかー、ってみんなが言うてた。そうしてうちにふーっと倒れた」そうである。この時は三代目小紫（多恵子）が急遽代役で相模を演じた。「まだ若くて、相模をできる歳ではなかったけれど、藤の方は何度もして役は全部飲み込んでいたから、急遽、舞台に出た」とのことである。

七代目嵐三五郎 七代目吾妻屋嵐三五郎も松竹を飛び出し、新鋭歌舞伎に加入した役者である。先代嵐三五郎は興行師松尾国三であり、松尾から三五郎の名を譲り受けた。新鋭歌舞伎解散後はやはり小芝居・中芝居で活動し、昭和二十六、七年頃は、市蔵劇団にも在籍していた。昭和三十三年ころは細川興行の座頭をした。東北出身だが妻が福岡の人であったため、引退後は福岡に住み、昭和三十四年から亡くなる昭和五十八年まで福岡名士劇の指導をした（註50）。

市川栄舛 市川栄舛は二代目左団次の弟子で、名題役者である。栄舛と名乗ることもあった。巽太夫（藤田謙治郎）が大正十三年頃、四谷大国座で活躍していたちようどそのころ、市川三升や河原崎権十郎などを座頭とする一座に出演している。終戦直後は沢村清之助と組んで横浜で芝居をし、昭和二十二年頃は座頭となって巡業していた時期もあり、かたばみ座にも参加している。座頭級の役者で、昭和二十年代後半には細川興行や市川市蔵劇団に在籍していた。看板役者の市川右田次を失っていた細川興行では、テコ入れのために昭和三十二年に栄舛を再度迎えたが、この時小池樞歌が尽力したことは前述のとおりである。「タツパ（身長）はないがハナのある芸」と小池は評していた。

市川九女八 **市川女升** 初代中村芝寛の養子多三郎と一時期近い関係にあった女役者である。明治末期頃の生まれではないかと推察する。明治期に一世風靡した女役者市川九女八（岩井糸八）とのかかわりは不明である。本稿における九女八は、すべて人形振り上で上演する「首振り」（註51）といわれる子供歌舞伎の一座で修業をした。そのため「九女八さんの人形振りはまねできない」ほど見事なもので、新聞広告には九女八の人形振りを売りの文句にしている（註52）。顔も良く、簡単な化粧でも「出ただけで納得」させ、立女方の出来る役者だった。その後昭和十八年五月に女升と名を改め（註53）たが、その後も九女八で出ることも多かったようである。戦後は元新鋭歌舞伎の尾上多見丸と夫婦になり、多見丸・女升（九女八）で一座を組んで京都の西陣劇場で常打ちした時代もある。森毅は学生時代にこの二人の舞台を何度も見ており「僕は梅玉（先代）のお三輪（妹背山）より九女八のお三輪の方が好き」（註54）と褒めている。多恵子は舞台を共にしたことはないが、彼女が尊敬している女役者である。

市川右鶴 市川右鶴（註55）は大正十年前後生まれの女役者。前名は小鶴。先に述べた市川鶴之助の弟子で、鶴之助の晩年の妻である。美貌の持ち主で、女升と同様「舞台に出ただけで」客が納得し、なお且つ腕もすっかりしていた。多恵子に言わせると延見子と並ぶ程の腕を持った役者で、多恵子が尊敬していた役者である。「鶴之助・右鶴」を看板とした一座で地方を巡業していた時期もある（註56）。鶴之助・右鶴の一座に多恵子や勝三は子役として出ており、右鶴が『時雨の炬燵』の小春とおさんの二役早変わり、そしてお末に多恵子、勘太郎に勝三。勝三は右鶴に抱かれる場面で、子供ながらに「きれいな人やなー」と思ったという。昭和三十一年の鶴之助没後、昭和三十三年にかたばみ座に出演する。昭和三十九年頃市蔵劇団に加入し、立女方として活躍した。これまでも鶴之助の相手として「お師匠はん」と呼ばれていたのに、子役で出ていた多恵子の息子が「おばちゃん」と呼んだので、「おばちゃんって呼ばれちゃった」と苦笑いしていたという。右鶴は、同じく市蔵劇団に加入していた片岡延若と一緒に退団し、昭和四十年頃は二人で座を組んで廻ったが、間もなく延若が亡くなり、その後役者を廃業して淡路島に暮らした。「女俊寛よ」と寂しい暮らしを自嘲気味に笑っていたという。

片岡延若 北海道出身の中芝居役者で、中芝居の方では「延若さん」と言えば実川延若ではなく、この片岡延若を指すほど名は通っていた。座頭を勤められる力

を持っており、戦前から一座を率いて地方を廻っている(註57)。昭和三十五年頃より市蔵劇団に加入していたが、昭和四十年頃、市川右鶴と二人で市蔵劇団を退団して一座を組んだ。延若が北海道出身であったため当地での人気が高く、主に北海道を廻っていたが、まもなく癌で死去した。

市川女猿 市川女猿(註58)は戦争末期に松竹を離れ、戦後長く市川門三郎一座に居たが、昭和二十六、七年頃、初代団四郎(今井由吉)の一座にも加入していた。昭和三十九年大芝居に復帰し、四代目沢村可川を襲名し脇役で重宝された。可川は藤田栄(市川市蔵)のことを「田左衛門さん」と呼んでいたことから、藤田栄が松竹に在籍していた時の芸名が田左衛門の可能性がある。

市蔵劇団と関わりがあった役者 片岡秀郎や中村福太郎が典型的だが、腕があってもいい役が付かないことを不服として大歌舞伎を飛び出した役者は他にも多数いた。大歌舞伎の休演中に「勉強させて下さい」と加入したり、小芝居、中芝居の劇団を転々したりする役者もまたあった。右記以外に市蔵劇団と関わりがあった役者をあげてみる。松竹名題の五代目嵐瑠蔵(のちの嵐瑠瑠)や六代目嵐みんしを上置きとして、昭和二十年代に藤田栄の座組に招いたり、昭和三十年代には二代目猿之助の弟子の初代市川猿四郎(註59)を招いたことがある。藤田家の役者たちは沢瀉屋の名題市川猿十郎、市川秀猿(女方)なども共演している。

新鋭歌舞伎に居たという尾上菊太郎(註60)は顔が美しく垢ぬけた芝居をする役者で、市蔵のお気に入りだった。市蔵劇団には長く在籍し、『九段目』のお石などは大変良く、晩年は『六段目』や『引窓』の婆などの「ちょっといい婆」もこなす役者だった。

何でもこなせる座頭級の役者、緑屋尾上緑左衛門は押し出しの良い立派な顔をしており、主役も張れる役者で三味線もうまかった。『七段目』の大星などはまり役で、『寺子屋』では落ち着いた源蔵を演じ、サラサラとした役がうまく、市蔵劇団に長く在籍した。が、性格が優しく、「もう一つ張り上げるところ」がなく、前に出ない役者で『封印切』の八右衛門や『すし屋』の弥左衛門など、無理がない芝居で「端で盛り上げるといふ力のある役者」だったという。

昭和四十年前後に加入した片岡我蔵(註61)は東京弁でスカッと垢抜けした役者だった。『二部』の劇団に加入した一人に実川八百蔵(註62)が居り、良い役者であった。昭和二十年代後半に加入していた片岡松右衛門も、昭和三十八年頃加入した

市川権三郎(註63)も片岡長太夫(註64)も皆しつかりした座頭級の役者であった。初代中村芝寛(大森連平)の最後の弟子の中村芝蝶は女方を得意とする役者で、細川興行にも在籍していた。元松竹の市川小百合(男性)も中堅どころの綺麗な女方だったが体が弱く早く亡くなった。中堅どころの役者としては市川藤十郎・中村歌蔵・元片岡延若一座の河原崎河蔵や、市川長太郎・中村幸玉・片岡九蔵・尾上松右衛門・市川鶴蔵・市川勸十郎などがおり、岐阜出身の中村扇玉・関三右衛門もいた。中村染之助・中村福之丞は市蔵劇団に若い衆の頃から長く在籍し、芝居が休みの時には市蔵の岡崎市の自宅に同居していたことを多恵子は記憶している。その他、下廻り系の役者も大勢いた。

女方では中村芝香、市川鶴代や先述の尾上菊之丞もいた。沢村千鳥は大歌舞伎を出て市川団四郎一座に長く在籍し、団四郎一座が解散後に夫婦で市蔵劇団に移り、さらに市蔵劇団解散後に松竹に戻った。千鳥は団四郎一家(今井家)からは「千鳥のジイ」と呼ばれ、家族の面倒もよく見てくれたという。話が面白くて二代目松緑が「もつと話してくれ」というような人だったと多恵子は聞いている。市川成太郎も団四郎一座から移ってきた人である。細川興行が昭和四十五年に解散した後、大谷広三郎や尾上梅玉も市蔵劇団に加入した。女役者では二代目小紫の弟子の岩井小紅、市川権三郎の妻の市川牡丹、中村歌蔵の妻の市川喜代子(註65)などがいた。

浄瑠璃の太夫など 市蔵が一座を組んでいるときは、義太夫も四組、長唄連中も二、三組はつねに同行していた。昭和三十年代は四、五十人で巡演する大一座であった。先に述べたように市蔵の妻や義理の妹たちも下座を担当していた。

五、中芝居の中の梨園と腕のある役者たち

市蔵劇団は見事なまでの役者一家である。大森家では、初代芝寛お爺さんからして大一座を率い、自ら新作外題も工夫できる器量人であった。その妻も娘たちも芸事に長け、その夫たちも腕のある役者や「歩く百段集」と呼ばれる物知りも居り、息子は所作事の専門で、これまた新作外題を作り出せる力を持っていた。そして藤田家では、大森家の叔父たちの合流により、息子や娘たちが役者としての英才教育を受けたのである。「神田の伯父さん」と呼んでいた竹本巽太夫や「小

芝居の腕つきき」と言われた義理の叔父初代小紫の存在も大きかった。「生まれ
た時からチンとかシャンとかが子守唄で育った」息子や娘たちは、梨園の御曹司
たちと同じく、若くても比較的重い役を割り振られ、泣きながら胡弓の稽古をす
るなどの辛い思いをしながらだが、否が応でも成長して行ったのである。

そして、太夫元の子供というのはなかなかのステータスがあった。太夫元であ
る父の弟子たち、「若い衆」と呼ばれる若い役者も多いため、女の子であっても
家事の手伝いより芸事の稽古に身を入れた。坂東三津麓になった静香が七代目三
津五郎家の内弟子時代、魚が焦げても言いつけられたように「魚を見ていた」と
いう逸話からそのことが分かる。また、清之助の代役で出た菊之丞に対し子役を
していた多恵子が「あんた、台詞わかってんのか」と言ったり、多恵子の長男が
立女方の右鶴に対して「おばちゃん、それ取って」と言ったり、二部劇
団の太夫元をしていた荒五郎の息子が、やはり子役なのに大人の役者に向かって
「おまえはどないや。ワシは太夫元の息子やぞ」と偉そうにした話、あるいは妻
となった多恵子が「お嬢さん」と呼ばれていたことを時若（兼元末次）が嫌がっ
たというエピソードから、良浩・智子・多恵子・勝三の兄弟たちは中芝居の中の
梨園のお嬢やボンやワカダンナとして育てられたといってもよからう。

当時は劇団員という形ではなく、二ヶ月、半年、一年といった期間を区切って
太夫元が役者を集めて座組をするという形が多かったため、加入役者の出入りは
激しかった。彼等は市蔵劇団のメンバーのように家族のつながりはないので、あ
ちこちの劇団に出入りした。いわゆる「ドロロン」と言われるように突然姿を消す
役者も結構いたという。松竹大歌舞伎の中では居並びの腰元か大名ばかりしてい
た役者たちがいっばしの役を演じたいと飛び出したり、名題役者でも重用されな
い役者が小芝居・中芝居の劇団に加入した。典型的な例が松竹に対抗する意気ご
みで独立した「新鋭歌舞伎」の役者たちである。彼らは細川興行や市蔵劇団に出
入りをし、看板役者、上置きという形で活躍した。かたばみ座に参加した役者た
ちとも交流があった。前進座から移った役者も居た。地方を廻っていた役者が松
竹に戻る、という交流もあった。

こうした交流の中で、ある意味では役者の受け皿になっていたのが市蔵劇団に
代表される地方の中芝居であったといえよう。先に述べたようにベーシックで強
固なつながりのある役者集団に腕のある役者が上置きで入る、という形が市川市

蔵劇団を長く存続させた要因である。しかし、剣戟劇団と合同公演をしたり、小
芝居・中芝居役者が剣戟劇団に加入したりすることはあっても、剣戟の役者が小
芝居・中芝居の劇団に加入するということはなかった。同じ「役者」「芝居」であっ
ても本格的な歌舞伎と剣戟（大衆演劇）とは一線を画していた。

もう一点触れておきたいのは、小芝居・中芝居の劇団には女性が入り、男女
混合の劇団であったことが当たり前だったということである。その中には腕のあ
る女性の役者が多く混在していたことも見逃せないであろう。戦後も活躍した歌
舞伎の女優者については稿を改めて論じる予定だが、市松延見子、中村時子、市
川女升（九女八）、市川右鶴、そして二代目と三代目の岩井小紫、細川興行には
市川吾妻も居た。女優者は昭和初期で終わってはいないことをここで確認してお
きたい。江戸期には男女混浴歌舞伎は厳禁されていたが、明治期に至りその禁は
解かれ、諸大名お抱えの女優者たちが公然と女芝居を公演した。その流れはやが
て男女混浴歌舞伎となって昭和末期に至るまで複数の流れとなり、各地で多くの
観客がそれを支え、小芝居・中芝居の成立の基盤となっていたにもかかわらず、
その事実を目を向けられてこなかったことは問題であろう。

六、おわりに

本稿では昭和五十年まで活動した市川市蔵劇団メンバーと市蔵劇団に関わった
役者たちを追跡してみた。旅興行という形が映画ブームに追われ厳しくなっても
市蔵劇団の興行は「お客さんは最後までいっばい入っていた」という。小芝居の
全盛期が明治・大正時代であることは間違いないが、市蔵劇団の活躍は「小芝居
は終わった」といわれる戦後の話である。旅興行をしている歌舞伎劇団を小芝居・
中芝居に入れないというのならばともかくも、常打ちの劇場を持っていなくても
本格的な歌舞伎を行っていた役者集団が昭和五十年まで活動していたことは、演
劇史上の記録にとどめるべきであろう。それら小芝居・中芝居の劇団が、歌舞伎
界の若手あるいは脇役役者の育成の場にもなっていたことも注目すべきではな
らうか。また、そのころまで小芝居・中芝居の歌舞伎には女性が当たり前に入
っていたという事実を認識することが、「歌舞伎は男が演ずるもの」という近代
以降に創られた常識を考え直すきっかけになるのではないかと思われる。

本稿では市藏劇団の演目や芝居の内容、各役者の役どころなど、市藏劇団の芝居の実態に迫ることはできなかった。次稿では、小芝居・中芝居の独特な演出や型、及び彼らが創作し保持していた独自演目を追求し、大きな意味での歌舞伎界の多様性に注目し、小芝居・中芝居の存在意義を追求したい。また、今回断片的に述べた市藏劇団の時代的変遷をさらに整理し、また、市藏劇団の上演演目やそれぞれの役者の役どころから市藏劇団の活動内容を明らかにしていく所存である。

本稿は文科省科学研究費補助金2019年度基盤研究(C)19K01235「関西系小芝居(中芝居)の活動実態と地芝居との影響関係―地芝居の価値再発見に向けて」の補助を受けて進めている研究の一部である。

〔謝辞〕

岩井小紫師、市川団四郎師とご家族には長年に亘り多大なご迷惑をかけ、またご協力を頂き感謝申し上げます。情報・資料をご提供くださった坂東会伊藤桂子氏、嘉穂劇場理事長伊藤英昭氏、立命館大学名誉教授奥村功氏、竹本美功太夫(中島功氏)、(故)成瀬早苗氏、西川流西川箕乃助師匠、本研究開始当時に一緒にインタヴューを行った濱千代早由美氏、松竹(株)歌舞伎制作部松岡亮氏、山下博志氏に感謝し、とくに近世近代歌舞伎研究家小池章太郎氏には貴重な資料とアドバイスを頂きました。感謝申し上げます。

〔註〕

- 註1 その成果は浅野久枝、「子供歌舞伎振付師の系譜からみえる長浜曳山祭地芝居の傾向」『民俗芸能研究』第五九号、四―二五頁、二〇一五年。
- 註2 歌舞伎役者の場合の敬称は「丈」を用いるが、本稿では「師」で統一する。が、本文中の大部分では大歌舞伎の歌舞伎役者も含め、また、存命の方も含め、敬称をつけずに記載することをお許しいただきたい。また、旧字はすべて新字で表記する。
- 註3 二〇一一年から二〇一七年頃までは濱千代早由美氏とともにインタヴューを行った。今回記録した内容は、濱千代氏とともに調査した内容も含んでいる。
- 註4 『民俗芸能研究』に発表した拙稿では「中歌舞伎」の語を用いた。小紫師が「中芝居」と共に「中歌舞伎」の語も使っており、江戸期の関西で使われた「中ウ芝居」との混同を避けたかったため「中歌舞伎」で統一して書いたが、関西では昭和三十一年代までも「中芝居」の語が一般的であったことにかんがみて、本稿では「中芝居」

の語を使う。また、関東の場合は「小芝居」の語を使うこともある。

- 註5 小芝居についての著作には、阿部優蔵『東京の小芝居』演劇出版社、昭和四五年(以下『小芝居』と記す)、中川哲『東京小芝居挽歌』青蛙房、平成九年(以下『挽歌』と記す)、三宅三郎(国立劇場調査養成部芸能調査室)『小芝居の思い出(歌舞伎資料選書5)』、昭和五六年(以下『思い出』と記す)などがある。また、小宮麒一の『歌舞伎・新派・新国劇配役総覧』(以下『総覧』と記す)及び『歌舞伎・新派・新国劇上演年表』、平成一九年には小芝居も含めての記録が載せられている。
- 註6 古井戸秀夫『歌舞伎問いかけの文学』ベリかん社、一九九八年及び、佐藤かつら『歌舞伎の幕末・明治―小芝居の時代―』ベリかん社、二〇一〇年など。
- 註7 市川市藏劇団について書かれた記事は、奥村功「上方芸能風土記29 市川市藏劇団」上方芸能編集部『上方芸能』、二〇一四年、一九三号、一一二―一四頁がある。
- 註8 かたばみ座については『小芝居』四一八―四六八頁に詳細な記録がある。
- 註9 市川少女歌舞伎の活動については市川升十郎『かぶき人生』豊文堂、昭和五八年に詳しい。また現在、館野太郎氏がその活動についての研究を進めている。
- 註10 女優者と女優の違いは様々な定義がある。女性だけの歌舞伎一座の役者を「女優者」、あるいは大正期までの女の役者、とする場合もある。帝劇などに出演したいわゆる女優も歌舞伎外題を演じている場合もあり、検討すべきであるが、本稿では「お狂言師」と称された歌舞伎専門の女性役者の流れを女優者とする。
- 註11 松尾国三『けたはずれ人生』講談社、昭和五一年及び、国立劇場調査養成部調査記録課編『歌舞伎俳優名跡便覧(第五次修訂版)』日本芸術文化振興会、令和二年(以下『便覧』と記す)二四頁参照。
- 註12 松尾国三『赤毛布の旅芝居 大正十五年にアメリカに出掛けた巡業実話』演劇出版社「演劇界」、昭和五八年、第四一巻第一四号、七四―七八頁。及び松尾、前掲書、一四四―一八六頁。
- 註13 写真2と8以外は岩井小紫師蔵。写真8は市川団四郎師蔵。
- 註14 西村彰朗『一方の花 五代目上村吉弥の生涯』京都新聞社、一九九三年。新鋭歌舞伎のメンバーのうち、中心であった市川荒太郎と五代目上村吉弥になった市川右升と中村雁之助以外は『便覧』に記載がない。
- 註15 浅野、前掲論文、一四―一五頁にその経歴等を詳述した。
- 註16 写真2は山下博志氏蔵。山下氏は細川興行に在籍した役者沢村曙當の子息である。

- 人物同定は豊沢重松・市川吾妻の長女、故成瀬早苗氏の御教示による。
- 註17 西村、前掲書、四八頁。『便覧』には市川右田次の記載はない。
- 註18 『小芝居』三〇〇頁などに類出し、小芝居畑で活躍している座頭級の役者であることが分かるが『便覧』には記載がない。
- 註19 日記文面は小池章太郎氏より提供。
- 註20 吾妻の叔母は愛知県西尾市を本拠地として市川牡丹と名乗り、女歌舞伎を率いていた女優者だった。これについては稿をあらためて述べたい。
- 註21 以下の記述の中心的な情報源は三代目岩井小紫の兼元多恵子及び二代目市川団四郎の今井勝三で、彼らからの聞き書きが中心となる。とくに小紫師に対しては二〇一一年以降、五十回以上のインタビュー行っている。調査実施場所は小紫師自宅・京都市内飲食店や滋賀県長浜市・米原市・岐阜県垂井市・石川県小松市祭礼の曳山子供歌舞伎上演時、長浜市ゆう歌舞伎・長浜市三役修業塾指導会場などである。団四郎師に対しては長浜市・米原市・小松市の祭礼時や函館子ども歌舞伎上演時にインタビューを実施した。また家族各人の生年月日等は小紫師所蔵の改正原戸籍を参照した。大森家・藤田家・今井家の個人情報記載については両師の了解を得ている。芝居劇団も市蔵劇団も独自演目を持っていた。また、小芝居・中芝居には特徴的な演出も多い。それについては次稿で述べることにする。
- 註22 浅野、前掲論文、九頁にその経歴等を詳述した。
- 註23 坂東三津妻及び三津麓の内弟子時代については坂東会伊藤桂子氏のご教示による。
- 註24 『小芝居』二八九頁に載る、東京の小芝居で活躍した市川福之助とは異なる。
- 註25 三川屋など。『便覧』八一頁。
- 註26 吾妻屋。『小芝居』三七九頁、『挽歌』一五〇～一五四頁、『思い出』六二頁に詳しい。
- 註27 成駒屋。名古屋の生まれで一時期初代鴈治郎の養子になった役者。東京の小芝居で活躍した。『小芝居』四〇九～四一〇頁に詳しいが、『便覧』に記載がない。
- 註28 山崎屋。『便覧』一五六頁。『小芝居』三四四頁に、松竹に戻るとある。
- 註29 明治二十一年～昭和二十八年。松本幸四郎の弟子。『小芝居』四三九～四四〇頁、『挽歌』一一八～一二三頁、『思い出』六〇頁に詳しいが、『便覧』に記載がない。
- 註30 松尾、前掲書、一七四頁。
- 註31 昭和四年八月二七日、読売新聞朝刊記事。
- 註32 明治十八年～昭和三十一年。『小芝居』三五四頁、『挽歌』五六～五九頁に詳しい。
- 註33 『小芝居』三三三頁に「大阪中芝居の若手人気者」とあり、大正七年一月二月、四谷大國座に出演。『便覧』には記載がない。
- 註34 小宮麒一「寿劇場興行総録」『総覧』第三版、平成三年、五八～六九頁。
- 註35 沢村田之助、「銀座つれづれ」、銀座百店会発行『銀座百点』二〇一二年二月号、No.687
- 註36 昭和五十五年没。豊島屋。『便覧』三五頁。
- 註37 京屋。『便覧』三二頁。
- 註38 時若についての経歴は岩井小紫師からのインタビューに加え、『義太夫協会会報』第九五号、二〇一二年、及び亀岡典子「竹本の人々 豊澤時若①②」演劇出版社『演劇界』二〇〇三年五・六月号、及び「竹本人にきく―豊澤時若師の巻―」『義太夫協会会報』第七六号、二〇〇三年を参照。
- 註39 子供だけで歌舞伎を行う芝居をチンコ芝居と呼んだ。
- 註40 近代歌舞伎年表編纂室「近代歌舞伎年表京都篇別巻」、平成一七年（以下「年表京都篇」と記す）五二頁など。
- 註41 初代市川団四郎については川島康男「函館発東京大歌舞伎」聞きがたり北の大衆芸「みやま書房、昭和五年及び、二代目市川団四郎師などへのインタビューによる。宇野信夫「市川鶴之助のこと」『役者と噺家』九藝出版、昭和五三年。小芝居関係の書では取り上げられることの多い市川鶴之助だが、『便覧』には記載がない。
- 註42 明治十八年～不詳。『小芝居』三九五～三九六頁、『挽歌』一四七～一五〇頁、『思い出』六四頁。これほどに取上げられる役者だが、『便覧』には記載がない。
- 註43 三島由紀夫「芝居日記」中央公論社、一九九一年、二九頁。五〇頁でも称賛しているほどの役者だが、『便覧』には記載がない。
- 註44 小宮麒一「昭和一〇年代における他の歌舞伎小芝居等」『総覧』第三版 平成三年、七〇頁。
- 註45 昭和十四年「亡父中村鴈治郎追善興行 関西青年歌舞伎 中村扇雀大一座」の番付に二人の談話が載る。かなり腕のある役者であったようだが、『便覧』には記載がない。
- 註46 初演、寛政十一年七月、大坂中の芝居『雪国嫁成谷』の通称。蓮如上人奇蹟譚。主役は老婆茨。
- 註47 昭和七年十二月二三日。読売新聞夕刊記事。福太郎についても初代扇雀の女房役を勤めていたにもかかわらず、『便覧』には記載がない。
- 註48 註49

- 註 50 留美坂英編『定本嘉穂劇場物語』創思社出版、昭和五二年、一八三頁。創思社出版九州編集部編『定本福岡名士劇総覧』創思社出版、昭和六十年、三九頁および二六五頁。『便覧』二四頁。
- 註 51 『歌舞伎事典』平凡社、一九八三年、一五一頁。
- 註 52 『年表京都篇』二九頁。昭和一八年三月、三友劇場。
- 註 53 『年表京都篇』五二頁。
- 註 54 森毅インタヴュー「特集森毅の歌舞伎の青春」演劇出版社『演劇界』第五六卷第五号、平成一〇年。
- 註 55 『小芝居』四五七頁に「故市川鶴之助の未亡人」とある。宇野、前掲書に前名が記載されている。
- 註 56 昭和二十一～二十四年の北海道新聞や西日本新聞の宣伝の中にその名が出てくる。昭和十九年から二十一年頃の北海道新聞に「片岡延若大一座」の宣伝が多出する。
- 註 57 二代目猿之助の弟子。経歴等は『小芝居』四五六～四五七頁に詳しい。中村義裕（聞き書き）沢村可川「歌舞伎学会『歌舞伎 研究と批評』一一、一九九三年、一〇七～一二五に松竹を出て小芝居で活躍した時代の活動について可川自身が述べているが、『便覧』には女猿、可川の名跡とともに記載がない。また『小芝居』に「哥川」と記されている。
- 註 59 『便覧』四九頁。
- 註 60 現在までに新鋭歌舞伎に在籍していた「菊太郎」は発見できていない。自分で「新鋭にいたとき」の話をしていたというので、新鋭当時は別な芸名であった可能性がある。
- 註 61 十一代目仁左衛門の門下で、昭和二十年代から三十年代にかけ前進座に客分として在籍していた。前進座の河原崎長十郎が彼の芸を褒めていたという。小池章太郎氏の御教示による。
- 註 62 三代目八百蔵は昭和十九年に死去している。ここで取り上げた八百蔵は『便覧』一八九頁にある、代数なしで記載されている八百蔵と思われる。
- 註 63 『便覧』五八頁の三代目権三郎は昭和五年に没しているので、この権三郎ではない。『便覧』一四八頁や『小芝居』三四九頁の三代目長太夫は昭和九年に没している。ここで取り上げた長太夫は瘤のあった人だという。
- 註 65 市蔵劇団の番付の中には「市村喜代子」と記されていることもある。